



靴擦れの跡

「今まで行った街の中で、一番感動した場所はどこ？」

よく聞かれるし、私も人によく質問している気がする。その人の心に焼きついている景色をこっそり見せてもらえるような気分になれるし、単純にその街の景色が素晴らしいということもあれば、その街に忘れられない人がいるからなんてこともあったりして興味深い。

今年の初めに長くロンドンで働いていた友人が帰国して、時間が合えば会うようになった。同郷で同い年の友人は、それだけで価値観が似ている部分が多くありとても居心地が良い。近所の公園にヨガマットとクッションを持ち寄り、日が暮れるまで読書をしたり、図書館で待ち合わせをして、何を話すわけでもなく黙々と各々の作業をしたり。そうやって会うようになって何度目かのある日、彼女が私にこの質問をした。

私は少し考え込んで、ふと一つの街の景色が浮かんだ。ハンガリーのブダペスト。初めてその町に辿り着いた時を思い出すと、いまだに胸の奥が熱くなる。オーストリアから一人で列車に揺られ、そんなに美味しくもないサンドイッチを食べながら国境を超え、異国の言葉が全く聞き取れず、標識も読めず、ずいぶん遠回りしてなんとか宿に辿り着き、荷物を置いて早速街散策に出掛けたものの、気付けば白のコンパースに血が染みるほど靴ズレをしていた。正直に言うとウィーンの優雅でゆったりとした街の空気とは全く違い、役に立たないスマホマップを消して歩行者に道を訪ねるたびに鬱陶しが

Moon River

07



られたし、駅のインフォメーションのスタッフですらまともに話を聞いてくれずにたらい回しにされた。日本人はどここの国に行ってもわりと親切にもらえる事に慣れきっていた私は結構衝撃的だった。しっかりと道に迷い、タクシーも捕まらず、歩行者に話し掛けても目すら見てもらえない。

私は次第に自信をなくしてリュックの中に入れた最後のチョコバーを食べながら縁石に座り込んだ。左足の指の感覚がほとんどない。Wi-Fiが使える場所もない。真夏の昼下がり、照りつける太陽に汗が滲んで体力も限界だった。どうしようか考えた後、一番近くの大通りまで出るとちょうど観光バスが目の前を横切った。「きっとあのバスの行き先がこの町で一番栄えている所だ！」そう目星をつけた私は、一か八かそのバスが向かった方向に歩き続けてみることにした。靴ズレの痛みはとうに限界を超えてもう麻痺していて、それが逆に私を開き直らせた。

どれくらい歩いたのだろう、頬に照りつける陽が徐々に優しくなってきた頃、水の匂いがした気がして、その瞬間顔をあげると一気に街がひらけて黄金に輝くドナウ川が視界いっぱい飛び込んできた。ただ景色が綺麗、と言う理由で涙が出たのは後にも先にもこの時だけ。そんな話を友人にした。夢中で話す私に彼女は大きく相槌を打った。

「わかるなあ。もうなんかよくわかんないけど特別なんだよね、どれだけ時間が経ってもさ」

私も大きく相槌を打った。彼女にもそんな瞬間があって、それがロンドンだったと。私の話が一通り終わった後、彼女の話に聞き入った。聞けば聞くほど、その街にただただ恋しているんだと伝わってきた。忘れられない街の忘れられない夜に、これからの生き方を決めた瞬間がきっと誰しもあって。もっと優しい街も、甘やかしてくれる街も、ただただ楽しい街も、もっとご飯の味がマシな街も、いくらでも他にあるのに。

不思議だねえ、とケラケラ笑いながら話したあと、また彼女は難しそうな本に目を落とした。

azufeling